

# 声明譜から見た入声音の音価

浅田 健太郎

はじめに

筆者は浅田(二〇〇〇)において、声明譜に見られる種々の注記や記号を検討した結果、中世における声明に舌内入声音のみならず喉内入声音が残存していること、入声音が開音節として現れるのは有声子音の前が多いことなどを指摘した。また浅田(二〇〇二)では、声明譜において入声音部分に使用されている記号「半音」を取り上げ、その源流を中国漢訳仏典の陀羅尼音訳部分に求めた。

これら先稿においては、声明譜に見られる入声音が開音節かという点のみを問題として考察を行ったが、しばしば指摘される鼻的破裂音については触れるに留まった。本稿では入声音の音価について、舌内入声音・喉内入声音の場合を中心にさらに踏み込んで分析を加え、改めて三者の関係を捉え直してみたい。

口誦資料における鼻的破裂音について

本節では、入声音がいかなる音価で実現するかについて、先行研究を概観する。橋本(一九五〇)等により、有声子音前の入声音が「鼻的」な要素を持つことは早くから指摘されている。まず、鼻的破裂音が資料上にどのように現れるかを、諸家の指摘を元に見ていくことにする。

- ・「原典版聖典 御文章」の鼻的破裂音表示法。「ツ」と左傍に小さく「ツ」を記すのは鼻音の記号。」(福永一九六三)
- ・「山槐記」の「禮畢(レイヒツ)」に関する記述。「ツ字鼻二言入テ後音平聲也」(大野一九五九)(遠藤一九九八)
- ・連声(遠藤一九九八)

断絶の(「断絶を」の連声)、代筆な(「代筆は」の連声)「大蔵

長太夫扣狂言秘本」

実悪ジツアウ（「ジツアウ」の連声）、成佛疑シツブツウタガヒ（「ジヨウブツウタガヒ」の連声）【音曲玉淵集】

・ンツ表記（遠藤一九九八）

さうもんつ（雑物）、しん徒ツる（失墜）【目代盛増日記】

これらのうち遠藤（一九九八）の指摘する連声の例は、促音にナ行音が後続するもので、このような音韻変化が起きるには、「入声韻尾が鼻的破裂音であることが前提でなければならぬ」と説く。またンツ表記に関しては、「ンツ表記は、十六世紀半ば頃まで明確に存在していた鼻的破裂音を表す一種の音声表記であったと見做されるのである」としている。なおこれらの資料中に現れる鼻的破裂音は、一般の日本語の状態が口誦資料に反映しているとする見方が一般的である（岩淵一九四二等）が、キリシタン資料等外国資料において鼻的破裂音が見られないことについては、必ずしもうまく説明されているとは言えない。

次に本稿で取り扱う声明に目を転じると、岩淵（一九四二）は、「次統の音が有声音の時（母音を除く）は、鼻的破裂音で、無声音の場合は促音になり、入声ツの所で休止する場合は、促音になる事が多い」とする。ただし、この結論は真言宗で現在も使用されている声明譜「南山進流聲明類聚 附伽陀」（昭和五年刊）の調査を元

に導いたもので、古譜については言及されていない。そこで本稿では、江戸時代以前の声明譜における入声音の実態を調査していく。

### 声明譜における注記

声明譜に施された注記については既に浅田（二〇〇〇）で触れているが、詳しい内容の吟味には至らなかった。以下では前稿で紹介したものを改めて掲出した上で、新たな資料も加えて注記の内容を詳しく分析する。

注記の掲出にあたっては、促音化の起こり得る音声環境かどうか、すなわち、有声音前／促音化環境の無声音前（舌内・唇内）入声音は全ての無声音前、喉内入声音は〔ア前〕／非促音化環境の無声音前（喉内入声音が〔ア〕以外の無声音前の前に位置する場合）／語末<sup>3</sup>に分けて考える。

まず有声音前への入音について見てみる。

得受 クノ末ニノ響ヲアラスル也 不聞ヤウニスヘシ〔仁和寺

蔵「御流乞戒」〕

佛道 ツラツヨクノムヤウニノムトヘ入ナリ〔上野学園日本音楽

資料室蔵「要略集」〕

悉能 ン〔上野学園日本音楽資料室蔵「要略集」〕

悉能 ム〔田辺高山寺蔵「校正魚山叢芥集」〕

得長 ヲリメニカナヲ成シテキトツラクヲリクタスヘシ〔上野学

園日本音楽資料室蔵「要略集」

蜜門 カナヲ成シテ後スコシアリ ツトサハノトアラワスヘシ

〔上野学園日本音楽資料室蔵「要略集」

一乗 ツノカナヲアラワスヘシ カナヲ成シテ後スコシモナテ下

ノ乗ニウツルヘシ〔上野学園日本音楽資料室蔵「要略集」

佛道 カスカニハタラカスヘシ〔上野学園日本音楽資料室蔵「要

略集」

佛道 アラワス〔上野学園日本音楽資料室蔵「要略集」

減罪 此ノカトニテツヲ現スヘシ〔上野学園日本音楽資料室蔵

「要略集番断簡」

まず最初の四例を見ると、舌内入声音・喉内入声音ともに鼻音を  
思わせる記述が為されていることが分かる。喉内入声音の「得」に  
関しては、単なる「ㄷ」でなく、「ㄷ」の響「ㄷ」が加わっていることが示さ  
れている。舌内入声音の「仏」については、「ノム」という表現で  
鼻音であることが示されており、謡曲の術語と共通するものとして  
注目される。また「悉」に関しては、節博士の途中に「ン」「ム」  
が記されているもので、これも「ン」「ム」を節博士上に配するこ  
とで、鼻音性を表示しているものと考えられる。

次にその他の注記については、いずれも「仮名ヲ成ス」や「仮名

ヲ現ス」(以降一括して「仮名ヲ成ス」系とする)という記述が為  
されている。これらは「ツ」や「ク」で示される音声として実現  
し、ある程度の持続性をもって発声することを示すと思われる。

従って注記の種類としては、「仮名ヲ成ス」系と鼻音系の二通り  
の注記が見られることになる。この並存をどのように解釈するかで  
あるが、両様の注記が指し示す音価が同じである場合と異なる場合  
の両方の可能性が考えられる。

全ての有声子音前で入声音は鼻音性を帯び、鼻的破裂音「ㄷ」とな  
っていたとする前者の立場では、鼻音性を反映しない注記が存在す  
るのは、「ㄷ」と「ㄷ」が同一視される存在であったため、有声子音前が  
すべて「ㄷ」であったとしても、取り立てて鼻音性を表示する必要は  
なかったと考えることが可能である。また声明譜の注記は任意に施  
される場合が多く、同じ発声方法のところには必ず同じ注記が付され  
るわけではない。さらに、現代の声明の入声音が促音あるいは鼻的  
破裂音で唱えられ、一般言語と同じ「ㄷ」が使用されないことは、こ  
ちらの解釈を支持する。

一方、より素朴に考えれば、発声の仕方に特に注意を払って記述  
が行われている声明譜の資料性を重視し、それぞれの注記は異なる  
音価を指し示していると考えられることもできる。声明譜において、「仮  
名ヲ成ス」系の注記と鼻音性を示す注記が同一箇所に見られないこ  
とは、こちらの解釈を支持する。

本稿では後述するように、有声音前の入声音がなぜ促音化しないのかという点について合理的な説明ができること、南山進流の声明譜において舌内入声音を表す特別な記号「…」が使用されることの二点を重視して、中世における声明では、有声音前は原則として鼻的破裂音で実現されていたと考えることにしたい。

次に入声音が促音化すると考えられる環境の注記について見ていく。なお、声明譜に使用される促音化の注記として「半音」「半」が存在するが、これは後に別に検討することにする。

執錫 口ヲフサク〔大原三千院蔵「九條錫杖 長音」<sup>10</sup>〕

法界 フ者吹塞〔大原三千院蔵「九條錫杖 長音」〕

法界 舌ヲアキニツクヘシ〔上野学園日本音楽資料室蔵「要略集」〕

佛井(新漢音) 舌ヲツク如此〔大原三千院蔵「長音甲」<sup>11</sup>〕

佛事(新漢音) 舌ヲツク〔大原三千院蔵「長音甲」〕

一切 一ノ字ノ末ニ舌ヲアキトニテテ切ヘウツルヘシ〔田辺高山寺蔵「校正魚山薑芥集」〕

舌内・唇内入声音が無声音の前に位置する場合、喉内入声音が子音「レ」の前に位置する場合について、その注記を見ていくと、「半」「半音」以外にも右に挙げた例が見出された。喉内入声音が促

音化した場合は見出されなかったが、他の例は「フサグ」系のものと、「ツク」系のものに分けることができる。

「フサグ」系のものには「九條錫杖 長音」に見られる唇内入声字「執錫」「法界」があるが、これらは恐らく唇の閉鎖によって、気流の断止を指示しているものと思われる。

「ツク」系のもは「法界」「仏井」「仏事」「一切」があるが、これらは単に「ツク」とするものと「アギニツク」、すなわち上顎につくとするものがある。「ツク」の方もおそらくそれが示す内容としては、「アギニツク」と同様に考えて良いかと思う。これらは舌の動きを示したものが、さらに踏み込んで解釈すれば、硬口蓋、あるいは歯茎で閉鎖を作るとを指すと考える。

従って、注記を素直に解釈すれば、促音化するはずの環境にありながらも、後続音からの同化を受けず、解放を伴わない「p」「t」「レ」として実現されていることになる。しかしながら、促音化環境にある唇内入声音と喉内入声音が基本的に「ツ」で表記され、舌内入声音と同一視されていることから判断すると、これらの非同化音は、唱詠において一音ずつ丁寧に発声することから生じる特別な発声法であり、特に注意を要する部分に注記を加えたものと考えた方が妥当ではないだろうか。

いずれにせよ、この促音化する環境においては、気流の断止を明示的に示す注記が為されているということになる。

次に喉内入声音に「ㄨ」以外の無声子音が後続する場合はどうだろうか。

毒獸 サ、ヤキ音〔大原三千院蔵〕「九條錫杖」長音<sup>1</sup>]

毒蟲 サ、ヤキ音〔大原三千院蔵〕「九條錫杖」長音<sup>1</sup>]

俗諦 サ、ヤク〔叡山文庫蔵〕「九條錫杖」長音<sup>2</sup>]

毒獸 サ、ヤク心〔叡山文庫蔵〕「九條錫杖」長音<sup>1</sup>]

惑痴 サ、ヤク〔叡山文庫蔵〕「九條錫杖」長音<sup>1</sup>]

釋梵〔新漢音〕 サ、ヤク〔叡山文庫蔵〕「聲明抄」<sup>3</sup>]

藥叉〔新漢音〕 クノ字ハ又ヲ云フ時聊クト云フ也雖然非半音ニ

也〔東寺蔵〕「秘讚集」(一四九函五号)<sup>4</sup>]

速得 クノカナヲハナニイル、ナリ〔叡山文庫蔵〕「九條錫杖

長音<sup>1</sup>]

これらは「秘讚集」の例を除いて天台宗系統の聲明譜に見られる。多出する「ササヤク」という術語は、注記の内容を素直に受け取れば、気流はせき止められないものの、通常の発声に比して極めて小さく発声する、ということであろうか。だとすれば、促音化する環境下で見られた「フサグ」系・「ツク」系よりも、気流の断止が完全に行われていないと見ることができるとも。また「ササヤク」は喉内入声音専用の術語であり、舌内入声音とは異なった発声法を行

うものと考えられる。つまり、「ササヤク」系の注記の内容は、気流の断止という点で、閉鎖による断止だけでなく、その後の解放を伴う音声であったのではないだろうか。

天台宗系統では「ササヤク」系の注記によって促音化環境では見られなかった発声方法が特記されている一方で、通常有声音音前に現れる「鼻に入る」の注記が一例が見られる(「速得」)。これは「ㄨ」前の喉内入声音には、有声音音前と同様に完全な断止を伴わないという共通点があり、その流出性が強く現れたと解釈できる。

真言宗系統では「藥叉」に「聊クト云フ」「非半音ニ也」という注記が見られる。これも「ササヤク」と同様、断止と流出の中間、いわば「少流出」を記述したと見て、「ササヤク」系と考えておく。最後に入声音が語末に位置している場合に、どのような注記が施されるかを見る。

佛 □ヲ合スヘシ〔上野学園日本音楽資料室蔵〕「要略集」]

佛 ヲハリニ□ヲ合ス〔上野学園日本音楽資料室蔵〕「要略集」]

薩 □ヲ合ス〔上野学園日本音楽資料室蔵〕「要略集」]

説 □ヲ合ス ククムキカセス〔上野学園日本音楽資料室蔵〕「要略集」]

樂〔漢音〕 ク不聞〔東寺蔵〕「法則集」(一六四函四一号)<sup>5</sup>]

徳 ト〔漢音〕 ツト□内ヲスヘシ外ニツト聞ルヤウニハスヘカラ

ス〔田辺高山寺蔵〕校正魚山蠻芥集〕

佛 ヲハリニテ半音ニソトヲクキカヌカノホトニカナヲ成スヘシ

〔上野学園日本音楽資料室蔵〕要略集〕

徳 サ、ヤク〔叡山文庫蔵〕声明抄〕

説〔新漢音〕 ツメル〔叡山文庫蔵〕声明抄〕

佛〔新漢音〕 舌ヲ突□〔大原三千院蔵〕長音甲〕

薩〔新漢音〕 舌ヲツク〔大原三千院蔵〕長音甲〕

右に掲出した注記のうち、最初の四例に見られる「□ヲ合ス」は  
いずれも舌内入声音に用いられるが、発声器官のどの部分で「□を  
合す」のかは明確でないものの、「合わす」ことで閉鎖が作られる  
と考えれば、気流の断止を指示していると捉えられる。

次の三例は「不聞」「聞ルヤウニハスヘカラス」「キカヌカノホト  
ニ」と表現こそ異なるものの、「キカセズ」系として一括しておく。  
これらは喉内入声音、舌内入声音で使用されるが、どのような発声  
の内容を示しているのかは注記からは想像しにくい。しかし、「説」  
の例では、「□ヲ合ス」「ククム」という注記が「キカセズ」ととも  
に現れており、また「佛」の例においても、「半音ニ」「成ス」とさ  
れているので、「要略集」の「キカセズ」は断止を指示しているも  
のとするのが穏当かと考える。従って、語末の喉内入声音・舌内入  
声音は共に断止性を有すると解釈できる。ただし喉内入声音に関し

ては「ササヤク」も現れるので、完全な断止を伴わない場合もあつ  
たようである。

最後の三例はいずれも舌内入声音で、天台宗系統の譜で確認され  
たものであるが、既出の「ツク」系の他に「ツメル」という注記が  
見られる。謡曲などでは「ツメル」は促音を表すので、「ツメル」  
も気流の断止を指示するものと考えられる。

以上により、声明におけ  
る語末の入声音は、岩淵  
（一九四二）の指摘する通  
り、鼻音性を注記したもの  
が見られないことが確認で  
きる。語末に見られる多様  
な注記の中には、「ササヤ  
ク」のように明示的に断止  
を指示していないものもあ  
るが、大勢としては、「ツメ  
ル」「ツク」「□ヲ合ス」の  
ように断止を指示したもの  
が多くを占める。

以上の調査をまとめて、  
表1に示す。

表1 各注記の出現環境(○：天台宗系統、●：真言宗系統)

		無声子音前		Ⅲ 語末	Ⅳ 有声 子音前
		Ⅰ 促音化環境	Ⅱ 非促音化環境		
断 止 系	「フサグ」系	○			
	「ツク」系	○ ●		○	
	「ツメル」			○	
	「□ヲ合ス」系				●
	「キカセズ」系				●
流 出 系	「ササヤク」系		○ ●	○	
	鼻音系		○		●
	「仮名ヲ成ス」系				●

真言宗系統と天台宗系統を一括して捉えることが可能ならば、概して有声子音前(Ⅳ)には気流の流出を要する音声、促音化環境にある無声子音前(Ⅰ)には気流の断止を要する音声それぞれ実現することが分かる。そして両者を両極としてその中間に語末環境(Ⅲ)と非促音化環境にある無声子音前(Ⅱ)の存在があるが、より断止性が強く現れる(Ⅰに近い)のがⅢで、より流出性が強く現れる(Ⅳに近い)のがⅡであると言える。すなわち、その環境に実現する音声の断止性が強い順に挙げれば、Ⅰ、Ⅲ、Ⅱ、Ⅳということになる。

### 「ツ」「…」「半」の使用実態

次に、声明譜において頻繁に使用される仮名や記号について、その使用実態を観察することにする。

入声音に由来する促音には声明資料に限らず仮名「ツ」が使用されるが、一部の声明資料においては、「ツ」の古体…から派生し、記号化したと考えられる「…」が使用される。「…」の記号的な性格は、次の二点にまとめられる。

一つは図1の「佛」から出た節博士の終端に見られるように、通常の片仮名字体の「…」の字画が線で構成されるのに対し、各々の字画が線でなくむしろ点で表されている点である。もう一つは他の仮名が画面に対して垂直方向に据えられているのに対して、「…」

は節博士を基準に据えられている点である(図1では、「養」の「ウ」が画面に対して垂直に立っているのに対して、「佛」の「…」は節博士の線分に対して垂直に配置されている)。

以下では、入声音を示す

ために声明譜に使用されている仮名・記号として「ツ」「…」「半」を取り上げ、これらがどのような環境に現れるかを見ていきたい。調査範囲は真言宗系統の譜本における舌内入声字、喉内入声字、唇内入声字のうち、「ツ」「…」「半」が現れる箇所とし、「チ」「ク」「ギ」「フ」で表記されているものについては今回は取り扱わないこととする。

まず、次頁に掲げた表<sup>16</sup>のうち、「ツ」「…」が共存する二つの譜についてだが、これらはいずれも一例ずつ例外的に「ツ」が使用されているだけで、基本的には「…」で統一されていると見て良く、非促音化環境にある無声子音前以外の環境に広く分布する。

この「…」は、真言宗系統の中でも南山進流において用いられるが、なぜこれらの譜において「ツ」に替えて記号的性格の強い「…」が使用されているのだろうか。推測に過ぎないが、南山進流の五音

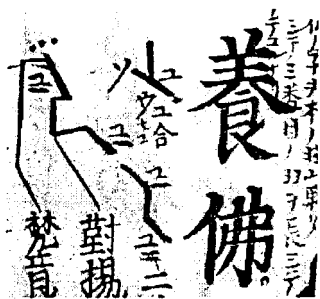


図1 記号「…」  
(「校正魚山薑芥集」より)

表2 「ツ」「…」「半」の出現環境

	資料名	種別	無声子音前		有声子音前	母音前	語末
			促音化環境	非促音化環境			
ツと…	広島大学蔵「声明集」	ツ	0	0	0	0	1
		…	77	0	26	4	35
	田辺高山寺蔵 「校正魚山叢芥集」	ツ	0	0	1	0	0
		…	98	0	23	4	38
ツと半	東寺観智院蔵「法則集 上下」(六七函二号)	ツ	6	0	9	0	4
		半	15	7	0	1	15
	上野学園日本音楽資料 室蔵「法則集上中下」	ツ	32	0	19	1	12
		半	5	2	0	1	9
	東寺金剛蔵「法則集」 (又別二二函二三号)	ツ	4	0	5	0	1
		半	3	6	0	0	8

博士によるまとまった譜が盛んに作られ出した南北朝時代から室町時代にかけて、一般に使用される日本語における舌内入声音が次第に閉音節化し、声明における入声音の音価から乖離していったことが関わっているとは考えられないだろうか。すなわち、普段の発音とは異なった、注意すべき部分として特出し、強調するために記号的な方法が採られたと考えられる。

次に表2の残り三つの資料は、いずれも真言宗系統の相應院流の譜本であり、「ツ」と

「半」とが並存する譜である。これら三つの譜の分布状況を元に、「ツ」と「半」の使われ方に関する特徴をまとめて表3に示す(母音前については用例数が少ないので割愛する)。

表3 「ツ」「半」の出現環境

	無声子音前		有声子音前	語末
	促音化環境	非促音化環境		
「ツ」	○		○	○
「半」	○	○		○

「ツ」あるいは明確な破裂を伴う「ㄗ」に近い発音だったと考える。

また「半」が有声子音前には現れないことは既に浅田(二〇〇〇)でも指摘したことが分かる。すなわち「半」は、入声音が母音や鼻音のような気流を伴う音声を伴って実現される場合には使用されない。



表4 声明譜における入声音の音価  
 (▲は本稿で扱わなかったもの及び見られなかったもの)

	無声子音前		有声子音前	語末
	促音化環境	非促音化環境		
唇内入声音	後統音に同化 (時に[-p <sup>h</sup> ])	—	▲[u]	▲[u]
舌内入声音	後統音に同化 (時に[-t <sup>h</sup> ])	—	[-t <sup>h</sup> ]	[-t <sup>h</sup> ]
喉内入声音	▲[-k <sup>h</sup> ]	[-k] [k <sup>h</sup> ] (時に[-k <sup>h</sup> ])	[-k <sup>h</sup> ]	[-k <sup>h</sup> ] [-k]

まとめ

以上、入声音がいかなる音価として実現するかについて、声明譜の記述を元に探ってきたわけだが、先引岩淵(一九四二)の現代声明譜による観察は、古譜においても大略当てはまっていることが明らかとなった。この事実は、声明の伝承性によって、その発声法の内容がほぼ保存されていることを意味する。よって、これまで見て

きた入声音の音価は、声明譜が盛んに作られた鎌倉時代のものと見て良いと考える。その音価について声明譜に施された注記や仮名・記号を材料に詳細に考察したところ、音価としてもつとも断止性が強く現れるのが促音化環境にある無声子音前であり、順次語末、促音化環境にない無声子音前、有声子音

前の順で音声実現に必要とされる断止性が弱くなる傾向を見出すことができた。以上の観察の結果を表4に示す。

さて、最後に鼻的破裂音について言及しておく、本稿で観察された鼻音性を明示した注記は、一例の例外を除いて全て有声子音前に位置しており、語末には現れない。このことについて岩淵(一九四二)は声明、平曲、謡曲、御文の比較を行い、声明が最も古い日本語の状態を反映していると述べている。これが認められるとすれば、有声子音前という環境が、鼻的破裂音発生の一つの契機として作用した可能性があると考えられる。有声子音前というのは、濁音前あるいは鼻音前ということだが、漢字音、特に呉音読の世界において濁音が前鼻音を伴っていたとすれば、この鼻的破裂音は促音化と同じ原理、すなわち一種の同化現象として捉えられる。つまり、入声音に後続する鼻音性によって逆行同化が行われた結果、入声音も鼻音性を有するものとして実現したということになるうか。

声明において有声子音前にのみ現れた鼻的破裂音は、謡曲等では語末に波及しているが、その要因は定かではない。筆者としては、モラ言語的性格が強まるに従って、語末の入声音にも一定の持続が必要になり、既に行われている鼻的破裂音が流用されたものと想像している<sup>20</sup>。それらの資料において語末に開音節が選ばれなかったのは、未だ入声音が音韻として開音節との対立を完全に失っておらず、/t/との差異化が図られたと解釈したい。

また、一般の日本語についての程度鼻的破裂音が使用されていたのかは判然としない。ここでは鼻的破裂音を「学者的発音であった」とする大野（一九五九）説を採り、そのような教養階級層に限って用いられたものが声明に反映され、一般の日本語へも一部波及したものの、その影響は限定的なものであり、大勢としては入声音と開音節の対立が解消する方向に進んだと考えておく。逆にいえば、両者の対立を維持しようとする言語（声明や謡曲等）において、鼻的破裂音の残存が認められるということになる。

注

- 1 なお、「入声音」という術語は音韻論上の術語（音節末に現れる音韻として使用される場合と、音声学上の術語（母音が後続しない音節末子音「<sup>1</sup>」<sup>2</sup>「<sup>2</sup>」<sup>3</sup>）として使用される場合とがあり得るが、本稿では前者を「入声音」とする。
- 2 促音化を起す状況については沼本（一九八二）に依った。
- 3 ここで言う語末とは、明確に後続に休止がある場合を指す。具体的には、句末、文末、句切点が後続していれば語末と認める。意味的に一語を認定することも可能だが、字音直読で読む声明においては意味に関係なく促音化などの音韻変化が起こる場合があるため、確実に語末と言える例のみを挙げる。
- 4 いずれも呉音読。以下特に指定しない場合は呉音とする。
- 5 貞治三年（一一三六七）写。真言宗相応院流譜本。沼本克明氏所蔵の紙焼写真による。
- 6 寛正三年（一二四六二）写。真言宗西大寺系譜本。新井弘順（二九八六

による。

- 7 寛保三年（一七四三）頃刊。真言宗南山進流声明譜本。私蔵デジタルカメラ画像による。
- 8 室町時代写。真言宗西大寺系譜本。私蔵原本調査記録による。
- 9 鼻的破裂音の音声記号の表記方法については諸説があるが、大野（一九五九）は「舌尖乃至舌端を上断にあてて閉鎖を作り、急に咽頭から鼻腔への通路を開き息を鼻へ押し出して発する破裂音があり、その音声記号を仮に「<sup>1</sup>」とすれば、その他にも主なものとしては「<sup>2</sup>」「<sup>3</sup>」の二種があり」としている。ここで「<sup>1</sup>」は当該論文特有の記号で「<sup>2</sup>」とは峻別されており、説明にある通り鼻音性を有している。本稿ではIPAにおける鼻腔解放の記号を使用し、「<sup>1</sup>」で表記する。
- 10 文永七年（一二七〇）写。天台宗系譜本。沼本克明氏所蔵の紙焼写真による。
- 11 南北朝時代写。天台宗系譜本。沼本克明氏所蔵の紙焼写真による。
- 12 江戸時代写。天台宗系譜本。私蔵紙焼写真による。
- 13 江戸時代写。天台宗系譜本。私蔵紙焼写真による。
- 14 鎌倉時代写。真言宗相応院流譜本。沼本克明氏所蔵の紙焼写真による。
- 15 院政期写。真言宗相応院流譜本。沼本克明氏所蔵の紙焼写真による。
- 16 広島大学蔵「声明集」南北朝時代写。真言宗南山進流譜本。私蔵カラ「写真による。【鎌倉時代語研究 第二十三輯】（武蔵野書院、一九九九）に花野憲道氏による解題と影印がある。
- 東寺観智院蔵「法則集上下」（六七四二号）明徳五年（一一三九四）写。真言宗相応院流譜本。沼本克明氏所蔵の紙焼写真による。
- 上野学園日本音楽資料室蔵「法則集上中下」応永十八年（一一四二）写。真言宗相応院流譜本。私蔵紙焼写真による。
- 東寺金剛蔵「法則集」（又別「三函三三号」）江戸時代写。真言宗相応院

流譜本。沼本克明氏所蔵の紙焼写真による。

- 17 ただし、まれに舌内入声音と同一視され、「ツ」で表記される場合もある。

- 18 ただし榎木(二〇〇六)は呉音系漢字音における濁音は鼻音を伴っていなかったと主張する。しかしながら、本稿で取り扱った鼻的破裂音の分布を見ると、呉音体系の清濁の対立は和化が進み、和語と同様の状況となっていたと考えた方が現象をうまく説明できるものと考ええる。

- 19 このように考えれば、漢字音において濁音及びナ行音・マ行音の前で促音化が起こらないことも合理的に説明できる。すなわち、入声音に子音が後続するときは例外なくその子音の同化を受け、清音の場合はその清音と同じ音声となり、濁音・ナ行音・マ行音の場合はその鼻音性の影響を受け、入声音も鼻音性をもって実現すると考える。

- 20 モーラ言語的性格への変遷についての筆者の考えは浅田(二〇〇四)にまとめてある。

#### 参考文献

- 浅田健太郎(二〇〇〇)「声明資料における入声音」『国語学』五一巻三号  
浅田健太郎(二〇〇二)「声明譜に見られる「半音」の源流について」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第五〇号  
浅田健太郎(二〇〇四)「漢字音における後位モーラの独立性について——仏教声楽譜から見た日本語の音節構造の推移——」『音声研究』第八巻第二号  
新井弘順(一九八六)『資料影印 要略集』『東洋音楽研究』第五十号  
岩淵悦太郎(一九四二)「国語における入声の歴史と外来音の問題」『日本諸学振興委員会研究報告』第二輯、岩淵(一九七七)に再録  
岩淵悦太郎(一九四二)「平曲における入声の取扱い方」『皇国文学』四、岩淵(一九七七)に再録

岩淵悦太郎(一九七七)『国語史論集』筑摩書房

上野学園日本音楽資料室編(一九九五)『日本音楽史料集成1 古版声明譜』東京美術

榎木久薫(二〇〇六)『漢字音の「連濁」は如何なる現象か』第九十五回調点語学会研究発表会 発表資料

遠藤邦基(一九九八)『促音・入声音の「ンツ(ンチ)」表記——二字で表記することの意味——』『国語国文』六七巻二号

大野透(一九五九)「入声韻尾ツに関する新資料」『国文学言語と文芸』一卷四号

沼本克明(一九八二)「呉音説に於る促音化に就て——フ入声を繞つて——」『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院

橋本進吉(一九五〇)『国語史研究史料としての声明』『国語音韻の研究』岩波書店

福永静哉(一九六三)『浄土真宗伝承音の研究』風間書房  
福永静哉(一九九七)『浄土真宗伝承音概説——その歴史と現状——』永田文昌堂

#### 付記

資料調査にあたって、快く資料の閲覧をお許しくださった関係各位に厚く御礼申し上げます。特に、多くの資料を提供してくださった沼本克明先生の御寛容には、重ねて謝意を表したい。

—あさだ・けんたろう、島根大学助教—